

道博協ニュース

第24号

発行所 昭和63年9月1日
北海道博物館協会
札幌市白石区厚別町小野幌
北海道開拓記念館内
電話 011-(898)-0456

第27回全道博物館大会終る

昭和63年度の北海道博物館大会は、去る7月12・13日の両日、函館市において開催されました。今年度の大会テーマは地元函館の歴史にふさわしい「国際交流と博物館」であり、また、春には世紀の大工事であった青函トンネルが開通し、さらにこれを記念した青函博のもとでの開催であったためか、道内の博物館・園の職員並びに関係者が一五〇名から参加するこれまでにない大会でした。

大会第一日目は、9時半からの開会式のと総会が開かれ、ここで昭和62年度事業報告、決算報告及び監査報告がなされ共に承認、また、昭和63年度事業計画案及び予算案も原案どおり可決されました。さらに28回大会は帯広市において開催されることも決定しました。続いて11時半より「国際化時代における日本博物館界の現状と課題」と題し、日本博物館協会専務理事

年春に実施したアンケート調査結果について関事務局長から報告。これらの詳細については、現在、編集作業を進めております大会報告書に掲載される予定です。

第二日目は、地元市立函館博物館の千代肇、根本直樹両氏によるご案内で史蹟・五稜郭公園、函館市北洋資料館、道立函館美術館、五稜郭タワー史蹟館、午後には市立函館博物館本館を見学したあと、青函博会場にて自由見学、ここで散会して二日間にあたる日程を無事終了しました。



第27回北海道博物館大会 出席者総合影(昭和63年7月12日)

◆昭和六十三年 度 学芸職員部会総会報告

本年度の学芸職員部会総会は、道博協大会に合わせ昭和六十三年七月十二日、函館市啄木亭において、約三十名が集まって開催された。

野村部会長挨拶のあと、金盛事務局長から、昭和六十二年事業報告と昭和六十三年事業計画の概要が説明された。これに伴う決算案、予算案については、事務局の都合により、十月一日に夕張で行う学芸職員研修会の際に承認を受けることになった。

- 一、昭和六十三年学芸職員研修会について
- ・期日・十月十四日(金)、十五日(土)
- ・会場・夕張市石炭博物館
- ・テーマ・観光型博物館の建設と運営について
- (詳細は後日案内書送付)
- 二、昭和六十二年度、シベリア・極東博物館視察研修報告書の作成
- ・体裁・B5判オフセット
- 昭和六十四年二月刊行を
目途に編集集中

第二十七回北海道博物館大会を振りかえって

第二十七回北海道博物館大会が七月十二・十三の両日函館市で開催されました。

昭和三十七年の第一回大会以来実に二十七年ぶりです。

昭和三十七年頃の函館は北洋漁業の再開による好景気と高度経済成長の波にのって活気にあふれていた時です。大会の開催地を引き受けたもの

の、当時の函館博物館の状況は五稜郭内にある現五稜郭分館と明治十二年・十六年に建てられた木造の小さな建物が

二棟あるだけでしたが、北海道博物館協会の事務局所在地であること、古い博物館があること、会員各位の強い要請があったことで大会の開催地となりましたが、初めてのことで職員は手探りで運営に当たったこととす。

会場は商工会議所の古い会議室、参加者は三十名程度でしたが大会の中身は、道内各博物館・資料館などの収蔵資料の調査をすることや、資料館等のない地域に対するアプ

ローチの仕方、「資料台帳」、「資料カード」の作成方法などの研究をした……と聞かされていきます。二十七年を経過した今大会は、テーマを「国際交流と博物館」、講演はフ

イリップ・グロッド神父さんの「博物館の近代化と国際交流」で異色のものでした。「参加者の層も幅ひろく、百五十人を超え、地方大会としては最高の集まりを記録しました。これは各地域の博物館

に対する認識の高まりと、各職員員の熱意によるものと思われま

す。ここまで発展したことは、道博協の役員及び事務局の指導と牽引力に依るところであり、感謝と敬意を表しております。

今大会で感じたことは、国際化とか国際交流を推進しようとして

いる中で、外国人向けのパンフレット・ガイドブックなどの用意がある館は少なく、外国との資料の交流・外国人講師による講演会なども少ない、こうした状況下で

即国際化の対応ができる館は多くないと思われま

す。したがって各館のおかれて立

場や状況などをふまえて、どう対処するかをそれぞれの館が検討しなければなら

ないこと……。また大会日程の中に学芸職員部会が設けられて久しいわけですが、未だに学芸職員だけの会議に終わらせていることはとても残念なことです。

この部会では、かなり専門的に突っ込んだ話し合いがな

されていくようです。学芸職員部会の報告を全体会で受けて、検討する配慮がほしいものです。日程と会場の都合で分科会方式のときもあれば、シンポジウムやパネルディスカッションのこともありますが、いずれにしても

しい活躍をしていると聞いております。フランス・ブザンソン美術館でも二十七人の女性職員が働いているとのこと

です。日本の博物館・美術館でも女性ならではの役割もあるわけですから、もっと多くの女性職員が登用されてもいいと思います。こうした意味からも、これからの大会等には女性職員の参加を奨励して、将来は女性職員部会が設けられるようになってほしいと願っています。

最後に今大会で、不行き届きが

多く参加いただきました皆様をはじめ、道博協事務局の皆様が大変ご迷惑をおかけしましたことを、お詫びを申し上げますと同時に、運営に

ご協力をいただき盛会裡に終了できましたことに感謝申し上げます。

◆昭和63年度日本博物館協会全国大会のお知らせ
日本博物館協会の第33回全

国大会は下記の日程・テーマで開催されます。

期日…11月10日～11日
会場…栃木県宇都宮市・栃木会館

大会テーマ…生涯学習と博物館―使命と可能性を探求して―。なお、分科会は博物館の規模、公私立等の組織別、そのほか特定テーマなどのも

とに5分科会が設定される予定です。

記念講演…「東国古代寺院の造営」 国士館大学教授 大川 清氏
第一日(11月10日)
①開会式(10時～11時)、②記念講演(12時～12時)、③昼食(12時～13時)、④「生涯学習施策と博物館」(13時～14時)、⑤分科会(14時～17時)、⑥レセプション(17時30分～19時)

第二日(11月11日)
①全国博物館会議(9時～10時)、②パネル(10時～12時)、③昼食、博物館視察(12時～15時30分)、④全体会議・閉会式(15時30分～16時30分)

(市立函館博物館 館長 加納裕之)

北海道博物館大会参加記

「博物館と国際交流」の大会テーマのもとに開催された

第27回函館大会、私にとつては昨年の増毛大会に続いて2回目の参加でした。前回の「博物館と学校教育の提携をどうすすめるか」と同様時宜にかなったテーマ設定とともに、函館の博物館を集中的に見学

できることが大きな魅力でした。また、今回はわが町の二風谷アイヌ文化資料館が協会

へ加入して初めての大会であり、資料館の萱野茂館長と御同行できたことで、いっそう意義深い函館行となりました。

さて、大会における論議の柱である「国際化」ということについてですが、これはもう将来の問題というのではなく今すぐ対処していかなければならない当面の必須課題だと改めて痛感しました。

現実には足元を振り返って見ても、アイヌ文化伝承の地二風谷をめざして今年も内外から多くの人たちが平取町へやってきました。国・民族別に

分ければ十指を数えるでしょう。国際化は人ごとではな

い段階に至っています。「国際化時代における日本博物館界の現状と課題」と題した特別報告によれば、世界

の博物館界とりわけアジア・太平洋地域で日本が果たすべき役割はますます大きくなる

との由。フランスの美術館の動向を紹介しながら「博物館の近代化と国際交流」について講演

されたグロッド神父はお話の冒頭、「いろいろな人種、民族、文化があり、それで世界はおもしろい」という主旨のことを述べられていましたが、これを国際人の心構えかと印象に残ったことばでした。

シンポジウムでは、すでに数多くの経験を蓄積しているアイヌ民族博物館と道立近代美術館からの提言がありました。美術館から自館の持ち味

と、外国から訪れる来館者への対応ということの大きく2点に分けて整理されています。各々の点についてとて

も参考になるものでした。ところで、国家や民族、そしてそれらに属する人間の相互関係を、日本では普通「国際」という国に引き付けた言葉で一括して表していますが、

ヨーロッパ的な言語風土においては、直訳すれば「民族」となる表現を用い民族や民衆を主体にした文脈で捉えようとする傾向

があるという、ある言語学者の見解を読んだことがあります。この見地に立てば、二風谷アイヌ文化資料館は日常的にアイヌと非アイヌとの接触

交流のただ中にある、きわめて「国際(族際)的」な館だといえるのではないかと日頃考えていました。「内なる国際化」の必要性が指摘された

施設・史跡見学は、全部初めて訪れた所ばかりで、各館の常設展示・特別展とも見応えがありました。ただ、青函博では率直に言って企業の展示が「おざなり」な感じがして残念でした。そう感じた主な原因は、函館や青函トンネルとどう関係あるのかよくわからない内容のものが多く、

「青函」に懸ける博覧会主催側の意図が十分反映されていないことにあります。博物館と企業では事情が異なるでしょうが、今大会のテーマに即して言えば、その土地の特色

や人びとの感情を大事にし活かすことは、企業活動にとっても国際的な摩擦を緩和するうえでも今日強く求められていることだと思っております。

来年、再来年と大会テーマがどのように変わっていくのか、それとともに自分の問題意識や取り組むべき時々の課題が整理されていくのを楽しみにしながら、今後でもできるかぎり参加し続けたいと思っています。

(平取町教育委員会文化財・資料館担当主事 米田秀喜)

◆昭和63年度アイヌ文化財専門職員等研修会終了

これまで白老民族文化伝承保存財団および北海道ウタリ協会が主催してきた「アイヌ民族文化財学芸職員等研修会」は、本年度は名称も新たに北海道教育委員会が主催し、当協会が主管となって去る8月3日から5日にかけてホテル札幌会館(札幌市)を会場に開催された。

内容は、初日の早稲田大学教授 桜井清彦氏による基調講演「アイヌ文化に関する諸問題」のほか六名の講師による講義・演習、それに北大農学部付属博物館の現地見学もおこなわれた。また、参加者は博物館、資料館の学芸職員、教育委員会等の文化行政担当者、アイヌ文化に関わる教育関係者、研究者、その他一般の方々で、参加人員は、当初八十一名を見込んでいたところ、丁度夏休み中のこともあってか、およそ百三十名に及ぶなど盛会のうちに無事全日程を終了した。

日本動物園水族館協会 北海道ブロック

飼育技術者研究会報告

道内の動物園水族館の飼育係が年に春と秋の二度集まり、お互いの研究成果の発表を通じて交流を深めています。発表内容は動物の飼育方法、繁殖技術から調教、飼料、施設の改善、教育活動などに至るまで飼育係が取り組んでいる極めて広い範囲に及んでいます。

本年度の春期研究会は六月三十日、七月一日の二日間旭川市旭山動物園で開催されました。出席者は十園館二十三名で、十二題の演題が発表され熱心な討議が行われました。また、懇談事項ではキツネの被害に悩む釧路市動物園からの提案で各園館の実施しているユニークな害獣防止策が披露されました。これを受けて次回の共通テーマは動物園が『獣害の対策』となりました。一方、今回の小樽水族館の発表にもあり、最近の展示技術、特にFRPを使用したディスプレイが効果を上げ

ているとのことで、水族館が『ディスプレイについて』を宿題調査とすることになりました。

演題名は次の通りです。

1、イバラタツの繁殖と飼育について(稚内) 2、カピバラの繁殖について(旭川) 3、ダチョウの繁殖について(札幌) 4、オオタカの繁殖について(旭川) 5、白鳥池における新型フェンス完成後の水禽類の自然繁殖と今後の課題について(札幌) 6、ニホンザルの脱毛に関する調査の結果報告(釧路) 7、出産前後のヒグマの二十四時間観察結果について(登別) 8、オオ

ハクチョウの野外観察(帯広) 9、旭山動物園における青刈牧草の利用状況(旭川) 10、ピラルク水槽改修工事に伴う展示効果について(小樽) 11、施設改善と飼育技術の向上について(登別) 12、宿題調査報告 蜻蛉類・ベンギン・ラッコの施設について(サンビエ)

(旭川市旭山動物園
飼育係長 小菅正夫)

「アイヌセミナー」に参加して

今回、初めて参加した「アイヌ文化財専門職員等研修会」は百二十名余りの参加者を得て盛会でした。

第一日目は、桜井清彦氏による文化の系譜からみたアイヌ文化の成立の概説を講演いただき、次に、貝沢正氏からは沙流川というアイヌの生活の場を展開される開発と住民生活の関わり合いについて自らの体験の中から話されました。秋葉實氏からは、幕末の探険家、松浦武四郎の蝦夷地での業績を要領よくまとめられました。

第二日目は、佐々木利和氏より開拓使により道内で初めてまとまった形で収集されたアイヌ民族資料の東京国立博物館における現状を紹介され、特に急速に傷みが進行しつつある資料の修理・復原体制の早急な確立の必要を指摘されました。続いて、菊池勇夫氏からは奥羽と蝦夷の問題について、幕藩体制と接する奥羽の地にあって、蝦夷が異国人として

対置されていた意識と社会構造について、興味ある事例を豊富に史料をもとに話された。

午後からは、いささか講義に飽きてきた我々受講者に配慮してか、小川早苗さんによるアイヌ民具のお話と、実際に手を動かしてのアイヌ文様の切り絵の実技指導をいただいた。ぎこちない手つきながらも、いつしか全員が作業に熱中していました。会場を移しての北海道大学植物園では、附属博物館の標本資料、野草園のアイヌに利用された植物の見学、そして新設された管理棟2Fのアイヌ民族関係の展示室ではコタンコロカムイのヌサや羽毛服など、ここでしか見る事が出来ない収蔵資料を難波球雄氏の解説で見学出来、大変参考になりました。

第三日目は古原敏弘氏により、かつて空白地帯であった静内地方のアイヌ民族伝承の記録と資料の収集を昭和57年より精力的に進めてきた経過とその具体例が示された。それぞれの講義の後、若干の質疑もあり、全体として中



秋葉實氏がその講義の最後には「松浦武四郎を偶像化するのではなく、武四郎がアイヌに對して行った行為を通じてその心の大切さを継承してゆく事が大切」と結ばれた言葉が印象的でした。アイヌの物質文化の系譜をたどり、その伝承の保存・記録化を進める具体的行為を展開する中でも、その基本にすえるべき大切な事と考えます。

今後は、特色あるアイヌ文化を伝承する道内各地での継続開催と野外での実習を組み合わせたより充実した研修会の開催を企画していただくよう希望し感想とします。

(市立名寄図書館郷土資料室
学芸員 鈴木邦輝)

学芸員養成機関の

現状と課題

この六月、別府大学において全国大学博物館学講座協議会（全博協）の全国大会が開かれた。今回の主要なテーマは、文書館法制定に伴う対応についてであり、この法律の条文にある「研究のための専門職員」の養成を学芸員課程に取り込むための努力を行うべきか否かというものである。結局は研究課題となったものの、大勢は極めて消極的であり、その提案には批判的ではなかった。

欧米のこの種の専門職員はアーキビストと呼ばれ、国による違いはあっても相当に高度な専門教育を受けており、まさに研究者といつて然るべき人物が得られる職である。歴史的文書を含む各種文書の分類・研究・保管を行う職種であれば、当然、要求される水準であろう。わが国の文書館が目指す内容は定かではないが、「研究のための職員」であるならば、同じ位に高度な資質と知識が要求されることにならう。

大学の学芸員養成機関に、そのような人材を育成するための力も体制もないことを、担当者自身が最も良く知っていたのである。それどころか、学芸員養成の本来業務そのものが岐路に立っていることを認識し、危機感すら持っている担当者も少なくないのである。「専門的能力の育成」と「就職」に関わる問題がその根底にある。

所定の科目と単位の修得を条件として資格を付与する現行規定の下では、質的に多様な資格者を生むことになる。その一例として、博覧館向きの専門的能力を有さない資格者が極めて多いことを上げる事ができる。博物館業務に無縁な学科等に属し、しかも資格が得られるから取るという意識のために、その分野の学習は遅々として進まないものである。この点に関しては、「専門課程」との連携が言われて久しいが、現行規定の下では学生のやる気を喚起する以外に方法はないのが現状である。

ところで、学芸員養成機関の数は年毎に増加し、その数は一二四大学一二八講座に達する。また、そこから輩出される有資格者は、毎年四千人を超えるものと推定される。道内では、北大・道教育大札幌分校・同釧路分校・道都大・札幌学院大に講座があり、昭和五九年度の数値ながら、一六八名（道都大の数値は不明）に達している。一方、全国の博物館園数は昭和六一年当時で四三〇〇館余である。これは毎年生れる有資格者に近い数である。しかも求人極端に少ない。学芸員職を得るのは至難のことである。私の勤務する札幌学院大学を例に取ってみよう。昭和五四年に学芸員課程が設置されて以降、今年で八回、資格者を送り出している。その数は一七五名で、そのうち本学卒業生は一四八名、学外からの聴講生が二七名である。その一四八名のうち、学芸員職を得ている者は僅か五名、三％である。他大

学との比較の上では、これは必ずしも低い数値ではないが、大学としては決して満足のできる数値でもない。さて、「入口」と「出口」を常に考えなければならぬ。大学にとって、以上のような現状を看過し得るものではない。またそれ以上に、担当者にとつては厳しい問題である。そこでいろいろと研究を重ねると共に、試行しているのである。学芸員としてふさわしい資質と能力を持つ資格者を一人でも多く育成するにはどうしたら良いか。またそのような人材をその職につかせるにはどうしたら良いか。私共の試みの一つは、ボランティア活動の導入である。現在は夏季休暇中に行われる館務実習前に二日間のボランティア活動を義務づけているが、将来は、課程登録時の一年次から年間所定時間を全うした者が館務実習を行えるようにしようと考えている。意識の変革を求める手段である。また一つは、学芸員不在の博物館をお借りして、担当者・学生全員参加での収蔵資料の整理と展示の実習である。大

学内で行う実習にはおのずと限界があるため、その先を学外での実習に求めようというものである。こちらはカリキュラムに組み込まない形ではあるが、実施に移している。資料整理もままならない学芸員不在の館の手伝いの役割りも兼ねていて好評であるが、今後正式に実施する場合には、道内諸館のご協力のもとに行っている館務実習との兼ね合いを慎重に検討しなければならない。

道内の博物館にご協力願った「北海道の博物館現況調査」(昭和六一年実施、アンケート回数二三五、回収数一六二、有効回答数一六〇)によれば、学芸員不在は九九館、約六二％もあり、学芸員不足は七五館一八九名に達している。限られた数とはいえ、この潜在的な需要をいかに開拓していくかが、博物館の要求にこたえられる人材の育成と共に、当面の課題である(札幌学院大学人文学部 助教・鶴丸俊明)

館園紹介

二風谷アイヌ

文化資料館

昭和28年、ふとしたことからアイヌ民族の生活用具に興味を持ち、物の怪に取り付かれたかのように、ただひたすら買い集めた。買い集めたと言うと聞こえはいいけれど、腕一本、脛一本、一介の日雇い人夫の身であり思うに任せず、見当を付けてあつた物が金持ちに先を越され、口惜しい思いをしたのは一度や二度ではなかった。

苦勞をしながら買い集めた物であつても、五年経ち十年

過ぎるとかなりの点数になり、種類も150種類になったのが昭和44年頃であつた。点数や種類が豊富になったのと相前後して、貝沢正さん(初代館長47年〜56年)が平取町議会議員として昭和42年4月当選された。当選間もなくからアイヌ文化保存のための資料室のような建物を建てようと、44年までの間に公式あるいは非公式に十回以上の会合を持つた。しかし、思うように事は進展せず、業を煮やした私は、

自費でそれらしき物を建てようと思ひ、ブルトーザーを入れたらしをし、型枠用の板と鉄筋などを買って来た。請負は当時私の家を建てて下さった戸羽一郎棟梁にお願いをし、解体してあつた小学校の古材を利用し、30坪で30万円と金額まで決めたのが44年11月13日であつた。

その様子を見聞きして慌てたのが平取町。山田佐永一郎町長と地元選出の町議員沢正さんに松太郎さん、部落会長

の貝沢保さんの四人で私の所へ来られ、このまま萱野茂個



事業主体ウタリ協本部建築に着手、46年12月13日建物の検定合格。その夜地元の人20人ほどで内祝というわけで館内でカムイノミ神への祈り、少しの酒で喜びを分かち合っていた最中、貝沢正さんの母急逝。悲しい事であつた。

敷地180坪と民具160種類を萱野茂寄付。47年6月22日二風谷アイヌ文化資料館開館式。

開館当時は160種類500点足らずであつたのが、昭和63年8月現在320種類200点展示、アイヌ民族民具の豊富さでは名実とも日本一と自負している。

私個人所有であつた物も平取町へ譲り渡し、現在の展示物の総てが町所有の物である。

思えばアイヌの民具と道行きを始めてから35年の歳月が流れ、拙著『アイヌの民具』という本の全部が当館所蔵物である事を思うと、一人のアイヌの努力がこれほどに。低い

声で自慢話をさせていただき、物に、音声に、映像に、アイヌの事なら総て揃っている二風谷アイヌ文化資料館の紹介の言葉に代えたいと存じます。あつた。

二風谷アイヌ文化資料館

案内

所在地・055-01沙流郡平取町
字二風谷七八一三
電話番号・〇一四五七一二

二八九二

開館時間・午前九〜午後五時
休館・十二月一日〜三月三十一日、但し事前連絡によつては見学も可。

入館料金・大人三百円、小学生百五十円、団体二十名以上各々二百五十円、百円。

交通・JR苫小牧駅または富川駅前から道南バス「二風谷資料館前」下車

(二風谷アイヌ文化資料館 館長 萱野 茂)

館園紹介

三松正夫記念館

昭和一八年二月二八日夕有珠山麓一帯は激しい地震に襲われた。これを契機として以降二ヶ年をかけて、壮瞥村字九万坪の麦畑を中心に民家諸共大地を隆起させ、四〇七に弱の新火山が誕生したのであつた。





その頃、日本は国を挙げての大戦の最中で、しかも敗戦への急坂を駆け落ちつつある時で、世界の火山学史上希有なこの現象も軍部の極秘扱い命令で、歴史のかたに埋没したと思われたのであった。

を屠しての調査、記録を続け貴重な全記録資料を残した。その一部は、『ミッツダイヤグラム』として世界の火山学を志す者の教材となっている程である。

この二ヶ年の火山との融合により、『昭和火山』に魅せられた彼は、新山誕生直後にこの火山を全私財を投じて買取り、生涯その保護に狂奔し、観光開発の荒波に抗し続けたのである。

当「三松正夫記念館」は、自然を愛し、自然に導かれたその一生を顕賞し、遺志を継承し、災害を風化させる事なく、後世に伝え、また素人が

程大切な物はないという事、将来又新しい火山が誕生する可能性を承知していた彼は、時至れりと寝食を忘れ、生命

自然科学の分野で関われる限界の一例として人々に語り続ける事を目的として、『昭和火山資料館』の資料に『人』の部分を加え、三松正夫没後十年、生誕百年を記念して、昭和六三年四月二四日に開館したものである。

個人運営の小規模施設で、展示も手作りであるが、特別天然記念物「昭和火山」を主展示物に、こと昭和火山に関する資料としては、他にない充実した内容と自負している

【館内展示物】

- 新山噴火記録写真 .. 一〇〇
- 三松記録スケッチ .. 一〇〇
- 彩色絹地記録絵図 .. 二九
- 関係記念写真 .. 三〇
- ミッツダイヤグラム .. 二
- 新山生成定観測図 .. 二九
- 岩石標本 .. 一〇〇
- 著名人交遊記念品 .. 一〇〇
- 三松正夫遺品遺作等 .. 二〇〇
- その他 .. 六〇
- 【未展示収蔵物】
- 三松火山関係図書 .. 一〇〇〇
- 三松・火山関係新聞 .. 五〇〇
- 三松火山関係VTR .. 五〇
- 声のライブラリー .. 三〇



記録写真、絵画、遺品等

▲三松正夫記念館案内▼

所在地・有珠郡壮瞥町滝之町 一八四―一二
電話番号・〇一四二七―五―二二六五

開館時間・午前八時～午後五時
休館・十一月～三月。但し事前連絡で見学可。

入館料金・大人三百円、小人二百五十円。団体割引各五十円引。小学生団体百円引。
交通・洞爺湖温泉ターミナルよりバス、昭和火山行き終点（三松正夫記念館）
主宰・三松三朗

館園動向

◆忠類ナウマン象記念館開館

昭和63年8月に広尾郡忠類村字忠類に開館しました。同館には、昭和44年7月に忠類村晩成の農道工事現場で発見された化石をもとに復元されたナウマン象の骨格標本のほか、発見から復元に至るまでの経過などが6つのテーマに分けて解説されています。



建物は鉄筋コンクリート造、建物面積九八七・四㎡、入館料一般三〇〇円、小中学生二〇〇円、開館時間は9時～17時、休館日月曜日ほか、電話〇一五五八―八―二二〇〇

館園動向

◆北方民族博物館・オホー

ツク流水科学センター・開陽丸青少年センターの設計すむ

道立の博物館等施設として、昭和62年度までに基本構想が検討されてきた右の三施設は、昭和63年度に基本設計・実施設計の段階に入り、現在作業が進められています。

北方民族博物館は、北海道の文化に大きな影響を与えた北方周辺地域民族の文化に関する資料を系統的に収集、調査、展示、保存し、それらの人々を育んできた厳しい自然条件と文化のかかわり合いを明らかにし、日本文化の形成にどのようにかかわってきたかを明らかにすることを目的としたもので、網走市に建設が予定されています。道教委が社会教育課が担当しています。オホーツク流水科学センターは流水と海洋科学に関する資料展示、体験学習、情報提供などを通じて、流水の科学を正しく理解し、流水と人間

との関わりなどについて、道民の自己啓蒙と創造性を高めるための機能を備えた施設として、我が国で唯一の流結水地帯であるオホーツク海沿岸の中央に位置する紋別市に建設が予定され、道生活福祉部生活文化課が担当しています。

開陽丸青少年センターは、開陽丸の史跡と復元を主体とした青少年研修施設で、開陽丸及び船や海などに関する各種の歴史的な資料の展示等を通して、本道の歴史等を青少年に、正しく、楽しく理解し

てもらうとともに、船と海への夢を大きく育んでもらうことを目的としています。昭和62年秋までは、道生活環境部青少年婦人局が担当して検討して来ましたが、江差町長が中心となって財団法人開陽丸青少年センターが設立され、館の建設と運営にあたることになり、現在設計作業中です。これらの三館は、道の予算が認められれば、昭和64年度に建設され、道博協の仲間が増えることとなります。

事務局日誌

7・2 道博協大会職員派遣依頼状発送

7・3 国際交流アンケート調査結果集約

7・4 昭和63年度日博協顕彰候補者の申請について、同支部会員に連絡

昭和63年度アイヌ文化財専門職員等研修業務について北海道教育委員会と受託契約

7・17 道教育長に第27回北海道博物館大会の実績報告書提出

7・19 アイヌ文化財専門職員等研修会について道教委と協議、北海道博物館大会に関する礼状発送

7・22 アイヌ文化財研修会実行委員派遣依頼

「道博協ニュース」24号原稿依頼

8・3 昭和63年度アイヌ文化財専門職員等研修会開催（札幌市・ホテル札幌会館、参加者約一三〇名）

8・7 アイヌ文化財専門職員等研修会の結果報告書を

後援団体に提出、同研修会礼状発送、日博協顕彰候補者申請につき日博協に報告

8・25 北海道開拓記念館講座「古写真の保存と活用」の後援依頼につき承諾

新入会員

〈団体会員〉

北海道文化財研究所（札幌市中央区南9条西18丁目2-12）、幕別町ふるさと館（中川郡幕別町依田三八四-13）

寄贈図書

◇札幌芸術の森 野外美術館

（61）◇札幌芸術の森―北を創る、北が創る（要旨）（61・3）◇北海道立函館美術館要覧（62・6）◇夕張市石炭の歴史村 石炭博物館概要・常設展示目録（63・3）◇苫小牧市科学センター事業概要

（61）◇名寄市郷土資料報告（63・3）◇斜里町立知床博物館要覧（62）◇札幌市青少年科学館事業概要（62・6）◇かみふらのの歩み歴史年表

―上富良野町郷土館◇社会教育関係団体概況資料―財団法

人北海道社会教育協会（63）

◆博物館連絡協議会の動き

網走管内博物館連絡協議会では11月初旬の総会・研修会の準備を進めています。講師は科学技術館（東京）水嶋英治氏、ほかに開拓記念館中村齋学芸部長の予定です。

◆異動

道立近代美術館副館長小川亨氏（副会長）は、五月一日付で道立三岸好太郎美術館館長となりました。後任は近間郁雄氏で会則に従い副会長となりました。なお、前道立三岸好太郎美術館館長工藤欣弥氏は、従前通り協会顧問としてご協力をいただいております。

北網走北見文化センター館長長平正史氏（理事）は、八月五日付で、北見市教育委員会生涯学習推進室長となりました。後任は大原利夫氏で、同様に協会理事となります。

【編集後記】

博物館関係者には多忙な時期でしたが、心よくご寄稿いただき有難うございました。次号は十二月の予定です。